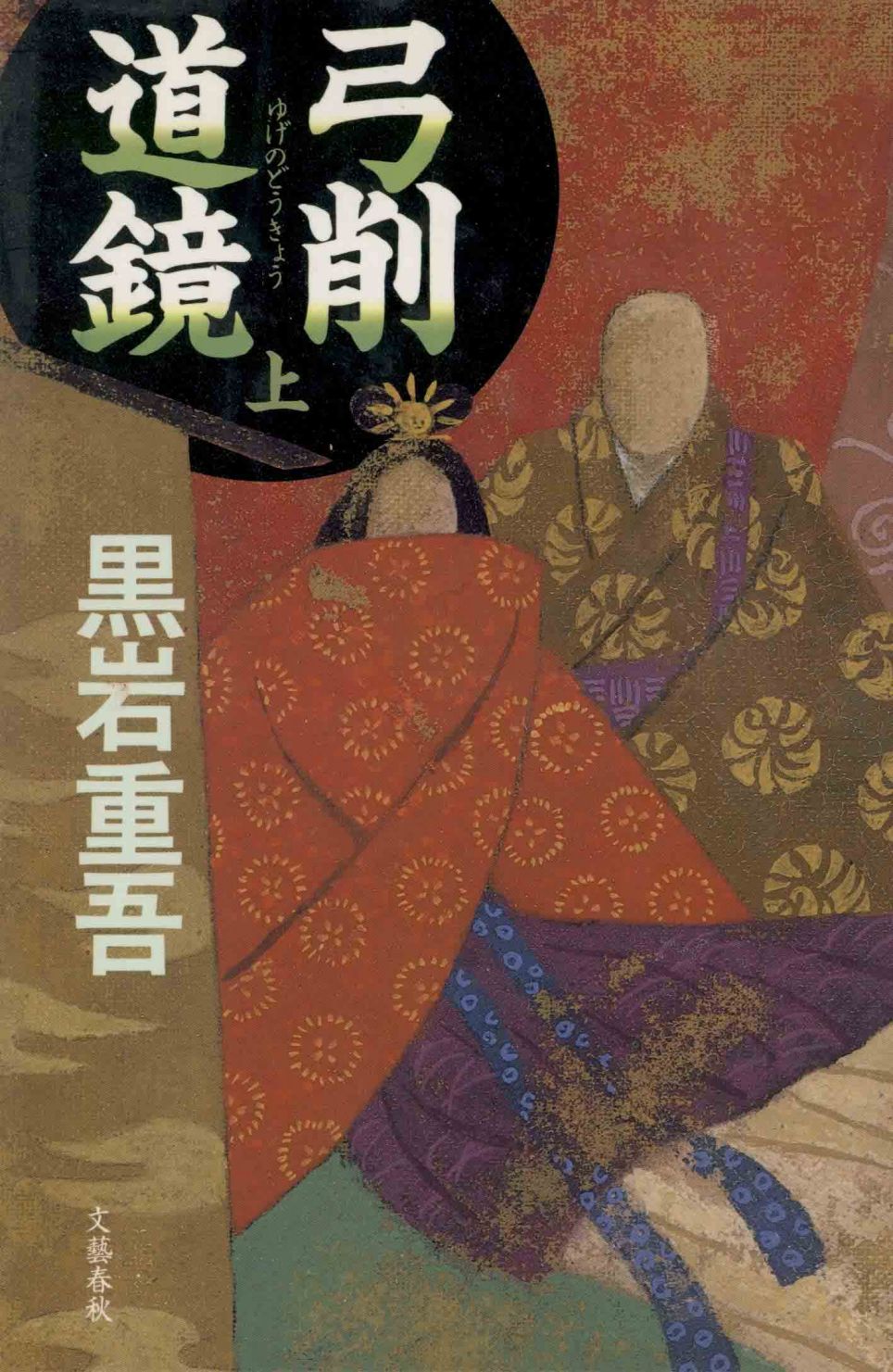
# 弓削道鏡（ゆげのどうきょう）上

黒岩重吾



文藝春秋

# 弓削道鏡

ゆげのどうきょう

上

文艺秋春

弓削道鏡　上

一九九二年七月一日　第一刷

著　者　黒岩重吾（くろいわじゅうご）

発行者　阿部達児

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二
電話東京（〇三）三二六五局一二一一

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本
定価はカバーに表示してあります
万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Jugo Kuroiwa 1992　Printed in Japan

ISBN4-16-313300-3

# 弓削道鏡　上

装画　秋野卓美

AD　平林育子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 1

神亀三年（七二六）の旧暦九月の中旬、一人の頑丈な若者が生駒山の南、信貴山と高安山の間の獣途を歩いていた。

髪を頭の上で無造作に結び先の方も紐で結んでいる。遠くから見れば黒い頭巾の形をしているが、髪先は後ろにやや垂れていた。

身長は約五尺五寸（一六五センチ）ぐらいだろうか、肩幅が広く胸も厚い。若者は麻布の上衣を腰で締め、筒様の袴をはいていた。皮履をはき弓を肩にかけ矢筒を背負っている。腰に山刀を吊しているのは猪や山犬などが襲いかかった時のためだろうか。

樹林が鬱蒼と繁り、熊笹や灌木に足を取られそうな獣途だが若者は慣れているらしく跳ぶように歩く。間もなく瀧の音が聞えて来た。生駒連山には瀧が多い。

若者は獣途が折れ、傾斜面を下る場所まで来ると樫の樹に手をかけ静かに腰を下ろした。顔を獣途の下草につけ周囲の物音を探った。時々、晩秋を思わすような風に樹々がざわめき、遠くか

ら鳥の声が聞えて来る。風が過ぎ去ると静寂そのもので、木洩れ日が刀身のように煌(きら)めいていた。
突然若者は傍の樫の樹に跳びつくと猿のように登り始めた。十尺（約三メートル）ほど登り枝に腰を下ろした。脚を振っていると二頭の野犬が熊笹の間から現われた。まるで狼のようである。樫の樹に跳びつき唸り、吠える。威嚇というよりも明らかに野犬は飢えていた。
「殺したくない、戻れ」
と若者は一喝した。
野犬の咆哮に負けないような大きな声だ。だが野犬は樫の幹に爪を立て気が狂ったように吠え続ける。
「仕方がないなあ」
若者は独り言のように呟(つぶや)くと矢を弓につがえて引き絞った。彼が狙っているのは野犬の眉間(みけん)ではなかった。尻のあたりである。どうやらこの頑丈で身軽な若者は殺生を余り好まない様子だった。樫の樹に跳びついた野犬は吠えると次の跳躍のために跳び退がった。待っていたように若者の矢が放たれた。鋭い音を残した矢は見事に野犬の尻に突き刺さった。野犬は悲鳴をあげて転がったが、よろけながら立ち上がった。
今一匹の野犬も驚愕したらしく樫の樹に跳躍する気力を失った。彼は片手で山刀を抜いた。振り上げると、
「去れ！」
と大喝した。
途端に野犬は悲鳴に似た声を発し尻に矢を突き立てたまま灌木の中に跳び込んだ。
若者は野犬が逃げ去ったのを確認すると、山刀を腰に吊し十尺ほどの高さから跳び降りた。

普通の者なら転倒する高さだが、彼は腰と脚の弾力を利用して着地した。二、三歩たたらを踏んだがすべりもせずに立ち止まった。白い歯を見せて深呼吸する。身体の割合にしては稚さが残った顔だ。十六、七といったところか。

若者は大きな鼻頭をつまみ脂汗を拭いた。余り表情に出ていないが矢張り緊張していたらしい。

若者は呼吸の乱れをなおすように指笛を吹いた。よく通る冴えた音色である。どうやら彼は自分の気持を鎮めているらしい。この年齢にしては一寸考えられない自己抑制だ。何時か彼の心は自分が吹く指笛の音が周囲に木霊し微妙な音色に変化することに集中していた。

間もなく彼は狭い渓谷に出た。これも慣れているらしく樹や突き出た岩に摑まり渓流に降りた。右手の五丈（約一五メートル）ほどの岩壁から瀧が落ち白銀の飛沫をあげている。

若者は弓矢や山刀をはずすと衣服を脱いだ。下帯も取り全裸になる。年齢が若いので筋肉隆々という身体ではないが、男子にしては艶やかな肌の下に弾力ある筋肉がはち切れそうに潜んでいるのが分るようだ。

若者は渓流の岩にしゃがむと掌で水をすくい身体に浴びせる。冷たいと見えて身体中に鳥肌が立つ。身体中に水を浴びた後、若者は渓流に入って行った。深さは一尺から二尺の間である。瀧壺の傍までたどり着くと気合をかけて跳び込んだ。飛沫を浴びながら瀧の下まで泳ぐと立ち上がった。岩床でもあるのだろう、彼の身体は膝下を水に没したまま落下する瀧の下に立った。

彼は両手を合わせ無念無想の境地に入ろうとしているが、落下する瀧が冷たく痛いらしく、時々眉を寄せ唇を噛み締めて耐えている。若者が瀧に打たれていたのは四半刻（三十分）足らずだった。

若者は獣のような声を上げると再び瀧壺に跳び込み、衣類を置いてある岩にたどり着いた。瀧

に打たれた肩から胸のあたりは赧くなっているが顔は蒼白で唇は紫色である。
若者は下帯をひったくると身体を拭き、絞ると摩擦を始めた。
彼が瀧に打たれ始めたのは五月頃だったからすでに四カ月はたっている。初夏から始めたのは、続ければ寒さにも慣れる、と思ったからだ。
だが彼の思惑ははずれたらしい。
くそ、くそ、と叫びながら若者は肌を摩擦する。次第に若者の顔に血が昇り始めた。
摩擦は約四半刻続き、彼は漸く身体を暖めることが出来たようだ。
こんな修業を何時まで続けたなら最早伝説的な存在となった役小角のように鬼神を自由に操ることが出来るのだろうか、と若者は到達することの余りにも遥かな道程を思い、一瞬絶望的な気持に襲われた。
役小角が朝廷に対する謀反の罪で捕えられ、伊豆に流されたのは文武三年（六九九）だから、まだ三十年もたっていない。

いうまでもなく役小角は山岳信仰における修験道の始祖ともいわれる人物である。もともと役小角は葛城の豪族賀茂役公氏で禅師でもあり呪禁師でもあった。東晋の道士葛洪は、深山に入り雑念を払って修業すれば仙人に会えると述べているが、八世紀に入ると僧侶や優婆塞（正式の僧にならず山などで仏教の修業をする者）の中に、山で修業し呪術的な能力を得ようとする者が出て来た。これは明らかに仏教と道教の混合で、朝廷では勝手に山で修業をしてはならぬと度々禁止したが、山での修業者は絶えなかった。経典を読むよりも山での修業に魅力を感じた僧がかなりいたなどの理由もあるが、役小角の呪術が大きく伝えられたことも影響しているようだ。

役小角は葛城山に入って修業し呪法を探求した。遂には呪術で鬼神を駆使し、水を汲み薪を取らせるようになった。命令に背けば呪術で縛ったという。役小角の弟子の韓国連広足は自分がいくら修業しても師に及ばないことを恨み、朝廷に讒訴し、役小角は逮捕されたのである。

後の『日本霊異記』によると役小角は、毎夜五色の雲に乗って大空の外に飛び、仙人と共に永遠の世界に遊び、花が一面に咲き乱れる庭に憩い、長寿の気を吸った。このため三十有余歳で岩窟に住み、葛の衣を着、松の葉を食べ、清泉の水を浴び人間世界の穢れを拭った。孔雀王呪（咒）経の呪法を修め、不思議な術を会得した。多くの鬼神を駆使し、金峯山（金剛山）と葛城山との間に橋をかけさせたりした。そこで神々は困り、葛城山の一言主の大神に役小角は天皇を滅ぼそうとしていると宣託させた。役小角は呪力をもちい、なかなか捕まえられなかったが、朝廷は小角の母を捉えた。役小角は母を許して貰うために自ら逮捕され伊豆に流された。だがその後も夜は富士山に登って修業した。三年を過ぎ許されて朝廷の近くに帰されたが、遂に仙人となって空を飛んだ、と述べている。

この説話には永遠の世界、長寿の気、清泉の水を浴びたとか、また仙人になったなど道教思想が強く窺われる。

それはともかくとして、役小角の呪術についての噂は次第に誇大になりつつあった。逮捕されてから約三十年もたつのだから無理もない。

ただ役小角の霊力に触れた人々はまだ生存しており、彼らの口から、見えない眼に水を注がれただけで眼が見えるようになったとか、脚を撫でられているうちに長年動かなかった脚が動くようになったなど、役小角の霊力を信じる者が多い。そういう話を聴いた者も当然霊力を信じるわけで、なかには役小角は仮の姿で本当の姿は仏だとか神だとか、真顔で口にする者もかなりいた

のである。

役小角が修業したという孔雀王呪経は密教の「孔雀明王経」のことであろう。この経は東晋の頃中国に伝えられ、後秦の鳩摩羅什や唐不空の訳がある。前者の内容は次のようなものだ。一比丘がいた。出家してまだ日が浅かったが庶民のために浴場を造ろうとし薪を取った。ところが黒蛇のために足を咬まれ毒が全身に廻り痛みが耐え難い。仏は、結戒結呪すると毒も害することは出来ない、刀も害を加えることが出来ない、悉く害を除く、と説いた。これは孔雀は毒蛇を喰うと信じられていたので孔雀王呪経には功徳がある、としたのであろうとされている。修法は孔雀明王法といわれ、厄除ならびに晴雨に用いられる。

一方唐不空訳によれば、黒蛇に足を咬まれた比丘に対し、仏は、大孔雀王呪ならびに諸神・諸天・諸菩薩名および神呪を授けてその毒を解くことを説いた。

勿論役小角の頃に「孔雀明王経」が入っていたかどうかは疑わしいが、四世紀時代に中国に伝えられたとすると、何らかの形で日本に入っていたことも考えられる。

ことに大事なのは「孔雀明王経」は道教典にも存在していることだ。

仏典を真似たのだろうがその内容は関係がないものもあるし、相通じる訳典もあるようだ。たとえば仏典が五方の天王をあげるのに対し、道典の方は五方の気の天王をあげている。対比させているのである。

いささか孔雀明王経の説明が長くなったが、本小説の主人公弓削道鏡は後年葛城山で修業し、また天平宝字七年（七六三）に、法師・弓削禅師として東大寺司所に孔雀王呪経を写させているからである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今、瀧に打たれ歯を食い縛りながら下帯の摩擦で血の気を甦らせたこの若者こそ、翌年岡寺に入り義淵僧正の末弟の一人に加えられた弓削道鏡その人なのだ。

道鏡という法師名がつくまでの少年時代の名は分らない。ただ道鏡は長男で弟に浄人がいる。浄人という名も本来のものではなく、平城京に勤めるようになってから好字で作った名のようである。

ここでは、出家し道鏡となるまでの名を兄郎としておく。

若者、弓削兄郎が山麓に出たのは未の下刻（午後二時—三時）であった。晩秋の陽ははや西に傾き、刈り入れの終った田畑を照らしていた。振り返ると大きな花が咲いたような紅葉や黄葉が眼に鮮やかだった。翌年のために田畑を耕し土に人糞などの肥料を撒いている農民もいた。牛に木の束を積み西に向って行く人達の姿も見える。弓削の村の住人だ。弓には最高のものとされる梓の木を伐り出したのだが、この頃では生駒連山でも梓の木は少なくなっている。

弓削兄郎の脳裡にこの春関係を持った止利子の顔が浮かんだ。兄郎と同じ十六歳だが豊満な身体をしており、盛り上がった乳房は兄郎の掌からはみ出すほどだ。色はそんなに白くはないが肌には絹のような光沢があった。燃えると汗ばんだ身体から甘酸っぱい匂いを発散させる。

止利子の父は弓削郷も属している若江郡の郡司の弟だった。兄郎は豊作を祈る若江郡の祭りで止利子と知り合い、お互い一目で気に入った。踊っている最中止利子の手を取り、小屋に連れ込んで媾合ったのだ。

それ以来、月に二度ほど会っていたが何といっても身分が違う。止利子の父は郡司補佐で正八位である。

兄郎の父は弓削村の長だが無位であった。正八位は位の中では下から二番目だ。一番下は従八

位である。数村を管轄している弓削郷の長の弓削宿禰は従八位だった。
だが最下位でも位があるのとないのとでは大変な違いがあった。

村に関して述べると、その頃は村の呼称はない。おそらく天武朝に出来た郡の下の里は人為的に作られた五十の戸によって成り立っていた。ところが霊亀元年（七一五）に、これまでの里を郷に変え、新たに郷の下に里を置いた。そして二十三里で一郷としたのである。俗にいう郷里制だが、この制度は天平十二年（七四〇）には廃止されてしまっている。
郷里制は二十五年間しか存続しなかったわけで一時的なものである。そういう意味において本小説では里の代りに分り易く村という呼称を使用する。

当時は歌垣による媾合や夜這いなど公然と認められていた時代だが、有位者と無位者とでは矢張り住む世界が違う。一度や二度の媾合なら問題にされないが、娘を持つ有位者の家は、相手が無位者だと知ると娘を監視し、男を家に入れなくなる。ことに貧農の若者のような場合は、村長あたりから圧力をかけ、若者を諦めさせる。強制的な失恋に悩み自害したり心中したりする男女がよく出るが、身分差別は当時も厳格だった。
弓削兄郎は両親に迷惑がかかるのを恐れ、村長の息子であることは告げなかった。
止利子には弓削村の若者だとだけ話しておいた。
案の定、止利子の一家は兄郎と止利子の関係に気付き、止利子の兄達が兄郎を待ち伏せ、兄郎の氏素性を訊いた。兄郎が答えないでいると、農民の若者と思ったのだろう、二度と妹に近寄るな、大怪我をするぞ、と脅した。

それでも兄郎は通ったが会えるのは三度に一度ぐらいで、待ち伏せをくらって袋叩きになり、這うようにして家に帰ったこともあった。

若くてたくましい兄郎は止利子のことを思うと胸も下腹部も熱くなるのだ。

兄郎は空を仰ぐと叫びたくなった。昂ぶりを抑えるべく胸を叩き、瀧に打たれたぐらいで、この昂ぶりを自由には変えられぬ、師よ、好い加減なことをいったのではないか、と唾を吐いた。

兄郎の師、円源法師は兄郎の悩みを知ると役小角のように修業すれば、女人を断つぐらい何でもない、まず三、四カ月瀧に打たれてみよ、と命じた。円源法師はまた、それが出来ないようで、どうして役小角のような呪力を得ることが出来るか、と酒臭い息を吹きつけた。

円源法師は、兄郎が山中で修業し、呪力を得たいと望んでいることをよく知っていたのだ。

円源法師が居住している寺は兄郎の自宅から南方半里ばかりのところにあった。智識寺のように庶民が一家や村の安泰、子孫の繁栄を願い財物を寄附して建てた寺である。国が建立した官寺や氏族が自分達のために造った氏寺ではない。

かつて役小角の霊験で重病から治ったという村長が最初に財物を寄附し、大勢の庶民が協力して建てたのだ。

円源法師が役小角の縁戚にあたるところから建てられた寺で、氏寺とも異なる。その代り寺は小さい。本堂には六尺ばかりの漆塗りの木製の仏像が須弥壇に安置されているが、漆はところどころ剝げている。

本堂の裏の庫裡は板床に麻布を敷いた五坪ほどのものだが、麻布もところどころ破れていた。庫裡の傍に竈が造られ水甕などが置かれており、住み込みで働いているのは円源の甥という十歳になる小坊主だった。髪を剃られたその小坊主に、円源は円興という法名を勝手につけ小沙弥円

興と呼んでいた。円源に法名をつける資格があるのかどうか疑わしいが、誰もそんなことなど問題にしていない。

それに円源はこのような小寺の法師にしてはなかなかの学識があり、儒教や、当時日本に入って来ている仏典についてもある程度の智識を持っていた。

弓削兄郎が氏寺の堅苦しい法師よりも円源を好んだのは、円源に破戒坊主的なところがあったからである。円源は女人こそ断っているが酒は好物で、村人達が持って来る濁り酒をよく飲む。酔って円源が嘆くのは役小角が讒言で逮捕され汚名のもとに死亡したことであり、鴨公の衰退だった。

加茂朝臣はもともと葛城の鴨氏で古代では中臣氏、今の藤原氏に負けない名族だった、という。蘇我氏が勃興してから蘇我氏に押され本宗家は秦氏を頼って山背に移った。それ以来、鴨氏は加茂氏となったが、藤原氏などに較べると問題にならないほど氏族の地位や勢力は低下している、という。

円源は弓削兄郎に法師になり出世することを説いていた。

円源にいわせると弓削氏は物部氏に繋がり、その祖饒速日命は、現在の天皇家よりも早く河内・大和の王者であった。そのことを兄郎は父からも聞いていたが、円源がしつこく話すようになってから真剣に耳を傾けるようになったのだ。

確かに現在では弓削連程度の身分なら郡司にもなれない。従八位の最下位の位を得ることも一生不可能だろう。

円源法師は兄郎によくいう。

「兄郎、おぬしには常人にない相がある、その相は瑞光を放っておる、天の光がおぬしの顔にあ

るのじゃ、法師になれ、必ず誰もが得なかったような位を摑むであろう、円源法師は嘘はいわぬぞ、これでも一時葛城山に入り修業したことがあるのじゃ」

そんな時、酔った円源法師の顔は真赫になり、脂汗が滲む。

弓削兄郎は眼を剝き、人並以上の鼻を撫でてみる。眉は濃く眼は大きく、顔の道具が大作りだ。俗にいう貴公子風の美男ではないが、止利子にいわせると男子らしさと精気が溢れ年齢に似合わない豊かな感じがするらしい。止利子は最初兄郎を見た時、二十歳に近い、と感じたようだった。

兄郎は家に向って歩きながら、

「法師になれ、といってもそう簡単にはなれぬぞ、だいいち止利子と別れられるか、それに法師の世界では女人との媾合は罪だとして禁じられておる、そんな阿呆なことがあるか、媾合は神が人間に贈られた悦びではないか、それによって子が生まれる、何故罪なのか……」

と鼻を撫でながら呟く。

円源法師は女人への欲望を断つには瀧に打たれるのが一番じゃ、吾が法師もそうして女人を断ったのじゃ、と説教した。

兄郎が初夏のある日瀧に打たれる決心を固めたのは、円源法師のいうように大法師になれるのなら、法師になっても良いと考えたからだった。

瀧に打たれるのは辛い修業だがなお辛いのは、打たれた夜は体内の血がたぎり、女人と媾合いたくなり藁蒲団（藁を麻布で覆った蒲団）に寝ていても展転として眠れないことである。妄想は妄想を呼び結局自慰でたぎる血を抑えてしまう。だがそんな後は、何ともいえないほどの自己嫌悪に襲われるのだ。

「円源法師、吾には無理じゃ、法師になるよりも止利子のような美女を妻にして、沢山子を産ま

せた方が良い、それに吾の家は村長じゃ、これで学問でも認められれば、郷の長になることも夢ではない」

兄郎は自分にいい聞かせるようにいう。

家に戻ってみると、母親は夕餉の仕度をし、父は弓に漆を塗っている。見ただけで立派な弓であることが分る。

「また瀧か、好い加減に弓作りに励め、でかい図体で無駄飯ばかり食われちゃ、たまらんぞ」

父は上眼遣いに兄郎を睨んだが、兄郎が肩を竦めて頭を下げると、それ以上の小言はいわなかった。いっても諾かないことを知っているからだが、兄郎の学識の深さに父なりに感心しているようだ。父の話によると父の祖先は蘇我・物部合戦で、隊長として最後まで戦い、殺した敵は数が分らない程で、斃れた時は身に数十本の矢を射込まれていた、という。

数年前、そんな話を初めて聴いた時、兄郎は、祖先の話など当てにはならない、子孫は大きな物語を作りたがるものじゃ、と少年らしからぬ顔で鼻を鳴らした。父は兄郎の反撥心を嗅ぎ取り、生意気な、と手を振り上げかけたが、何を思ってか口を歪めて横を向いた。

その翌日あたりから兄郎は、村人達から父の自慢話は嘘ではない、といわれた。村人達もそれぞれ祖先の自慢話を持っているが、兄郎一家の祖先である弓削連大音の活躍ぶりは、戦が終り奴にされた後も物部氏や弓削氏の人々の間で語られたらしい。

兄郎の曾祖父が持統朝時代に村長になったのも、昔からの有力者だった、という以外に、そういう祖先の伝承を持ち、村人から尊敬されていたからだった。

兄郎が氏族の祖先のことを考えるようになったのはそれ以来であった。

弓削兄郎が止利子に会いに出掛けたのは十月の中旬である。止利子がいくら板戸を開けようと



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com